FUEKI vol.71

公益財団法人 福武教育文化振興財団 機関誌「不易」

先駆的で地域への波及効果のある活動に焦点を当てる

第1回（2019年度）福武教育文化賞を贈る

今年度より福武哲彦教育賞・谷口澄夫教育奨励賞・福武文化賞・福武文化奨励賞を「福武教育文化賞」に一本化しました。教育と文化の両面がお互いの特色を発揮することにより、より良い効果を生み出すことを願っています。

浅野泰昌 氏

くらしき作陽大学 子ども教育学部 講師

表彰理由

乳児向け舞台芸術「ベイビーシアター」研究の国内第一人者であり、学生劇団との協働によってベイビーシアターなどを制作・上演し、乳幼児の情操教育に多大な影響を与えている。また、文化芸術と教育を結び付けた効果的な学生養成、人形劇の上演による地域に密着した地道で継続的な子育て支援は、優れた教育文化活動であり岡山県の地域振興に大きく貢献している。

受賞者コメント

これまで学生たちと力を合わせて作品をつくり、子どもたちに届けてきました。思い返せば、観客数が一人の公演や草ぼうぼうの公園での公演もありました。どのような場所であっても学生は一生懸命に上演し、子どもはそれを受け止めてくれました。この経験を学びの一部として、学生たちは大学を巣立っていきます。仲間と切磋琢磨して作品をつくり上げ、子どもに届けた体験が、卒業生の先生・社会人としての礎になることを願っています。この『学生養成』と『地域公演』の表裏一体の取り組みに全身全霊で取り組んでまいりました。『教育』と『文化』が統合された第1回目の福武教育文化賞を受賞することができ、本当に嬉しく思っています。この場に立つことができたのも、関係する皆さまが見守り支えてくださったからです。そしてこの賞は、学生・卒業生たちと共に受賞したものと心得ています。これからも学生たちと共に岡山県の子どもたちに作品を届けていきたいと思っています。志は高く、これからも頑張ってまいります。

お祝いの言葉

村上里佳子さん

くらしき作陽大学子ども教育学部3年生／学部附属児童文化部『ぱれっと』部長

福武教育文化賞の受賞、おめでとうございます。『ぱれっと』は、浅野先生が2008年に先輩方と立ち上げた劇団です。これまでに学内外で500回以上の公演をしてきましたが、先生のご指導のもと、先輩方のつくった作品やノウハウを受け継ぎながら歩んできました。先生は本当に『ぱれっと』が大好きで、部員一人一人をよく見て、演技指導はもちろん、保育・教育の現場に出た時を想定した助言をしてくださいます。学業と部活動で忙しい毎日ですが、先生ご自身が頑張っているのを見て私たち部員も頑張ろうと思うし、成長した姿を認め、褒めてくださるので、とてもやり甲斐があります。浅野先生の受賞を、部員を代表してお祝い申し上げます。

撮影：草加和輝

菅原直樹 氏

「老いと演劇」OiBokkeShi 主宰

受賞理由

高齢化社会の課題解決のため、「介護の現場に演劇的手法を用いる」という介護者が認知症の理解を進め深めることを目的とした活動は、先駆的な取り組みであり、画期的なアイデアである。演劇、介護のジャンルを超えた活動は、それらに携わる人々の意識を変える大きなきっかけとなり、今後も地域振興の向上に更なる貢献が期待される。

受賞者コメント

オイボッケシは、財団の助成金でスタートした活動になりますので、本当に嬉しく思います。2012年に千葉県から和気町に移住してきて、人生は大きく変わりました。和気町で親しくなった人たちと介護と演劇を結びつけるワークショップを行いました。そのワークショップの会場に一番乗りでやってきたのが、当時88歳の岡田忠雄さんでした。岡田さんは、僕をみるなり「監督、監督」と呼ぶので、ちょっと面倒な人がやってきたなと思いましたが、「よし、監督を演じよう」と思いました。それから5年たって93歳、オイボッケシの看板俳優となっています。これまで7作品を作ってきました。岡田さんと芝居をつくっていると、演劇というのは奇跡を起こす魔法のような営みなんだなと実感します。偶然出会った人々が、芝居を作ることで、その出会いを運命的なものにしていく。今、オイボッケシがあるのも、これまでの活動に関わってくださったすべての皆さまとの出会いのおかげだと、感謝しています。

お祝いの言葉

岡田忠雄さん
俳優

私のような田舎のじいさんが出ている芝居にこれだけの皆さんが注目してくださるのが不思議でなりません。今回の受賞は「感動」の一言に尽きます。これからも菅原監督と命の限り芝居を作っていきたいと思います。おめでとう、監督！

山地真美 氏

情景描写ピアニスト

受賞理由

ドローンによる空撮と即興演奏で日本各地の情景を残していくという、新しい芸術表現のジャンルを開拓した功績は大きく、ピアニスト個人の表現活動から大きく踏み出し、地域に根差した活動の輪が広がり続けている。県内にとどまらず、全国、世界への「発信力」「活動の広がり」は地域の未来づくりにとって重要な取り組みであり、今後更なる活躍が期待される。

受賞者コメント

今回このような素晴らしい賞をいただき、大変光栄に思っています。ピアニストとしての文化的な活動だけではなく、教育の面からも評価をいただけたということは私にとって大きな励みとなりました。音楽を入り口としながら、地域の歴史や文化、自然を発見し、音楽を通してそれを学んでいくという新しい音楽のモデルを、地域の子どもたちとの歌作りや岡山のみなさまとの100人オーケストラの活動で実現させてきました。これからも情景描写ピアニストとしての文化的な活動だけでもなく、地域の教育にも役立てるような新しい音楽のありかたを提案できるような人になりたいと思っています。

お祝いの言葉

鷲田猪佐武さん
「山地真美との100人オケ」チームリーダー

柔らかい話し方と態度で、どんな人とも常に笑顔で接してくれる人です。良い意味で「ピアニストらしくないピアニスト」。100人オケメンバーは彼女の親世代が多いのですが、頑張っている「みんなの真美ちゃん」を応援しながら、自分達も楽しんでいます。西日本豪雨災害から、真備町に何度も足を運んで活動していますが、その作品達に込められている「想い」に共感し感動しています。贈賞式でも流していただいた麦畑での演奏と映像がそれを物語っていると思います。古民家アトリエで、真備町の竹を使った楽器や、食器、おもちゃなどを作る時、誰よりも先に「やってみたい！」と言って、失敗しながらも凄く楽しむ真美さんが居ます。この子どもみたいな好奇心が、彼女の活動の原動力なのかなと思っています。この度は、本当に、おめでとうございました。私たちも自分事のように喜んでいます。

地域のトップランナーたちによる教育と文化のライブコミュニケーション！

贈賞式と同日に開催した「andFフェス」（2018年度助成を受けた団体による成果報告会と参加者全員による交流会）には約400名が参加し、新しい繋がりや活動などが生まれた貴重な交流の場となりました。

「**発表を通じてたくさんの方に僕たちの日々のガイド活動やその内容について知ってもらい、関心や興味を持っていただけたと思います。**最初にこの助成報告会とはどういう方が対象か知らず、クラス発表する程度の感覚だったので、実際の会場の様子にかなりプレッシャーを覚え緊張していました。しかし周りの方々もとても親切に接して下さり、なんとか僕たちの活動についての発表を終えることが出来ました。今回の報告会で、**日々の活動が誰かからの助成で成り立っているということを肌で感じたし、他にも様々な分野で活動をされている団体が沢山いることを知りました。**このような経験を、これからのボランティア活動に活かし、今後もより力を入れて活動していきたいと思いました」

「**財団の助成金は、事を成したい志の団体には、本当にありがたいこと。**今日の発表を聞かせてもらってより強く感じた」

「交流会に参加された方と相談ブースの担当者が、**相談以外でいろいろお話しできていたのは、意義深かった**と思います」

「いつもの相談とは違って楽しかったです！**ちょっと聞いてみようかな～？という方には、あの雰囲気がいい**と思います」

「**来年は、ポスターセッションで発表したい**と思いました。発表することで、皆さんに興味を持ってもらえるし、自分自身の振り返りにもなると思うので」

「初参加です。こんなにいろいろな活動団体があるのだと驚きました。**高校生からご年配まで**普段の活動では出会えない**幅広い層の参加者**でした。やはり、**情報を得るためには外に出かけることの必要性**を感じました」

「県民局単位ではできない**県内最大規模での交流会は迫力満点**でした。今回の交流会でないとお目にかかれない方々もおられ**情報交換ができて大変有意義**なものとなりました」

「初めての参加。**財団の支援によって、こんなに多くの団体が活動できていることに驚いた。**若い人の活躍が楽しみであり、応援したいです。ポスターセッションを聞きながら、地域で子どもたちを育てることの大切さを改めて感じた」

松浦理事長がゆく！ 子ども×アート

このコーナーでは美術教育の最前線で活躍するキーパーソンに、最新動向と今後の展開をインタビューしています。今回は、2018年度の入館者数が258万人と過去最高となった金沢21世紀美術館が取り組んでいる金沢市内の全小学4年生を招待するプログラム「ミュージアム・クルーズ」について、金沢21世紀美術館副館長の黒澤伸さん、エデュケーターの木村健さんに、経緯や成果、課題について伺ってきました。

金沢21世紀美術館　副館長　黒澤伸さん
金沢21世紀美術館　エデュケーター　木村健さん
聞き手：公益財団法人福武教育文化振興財団　松浦俊明理事長

黒澤さん×松浦理事長

松浦　金沢21世紀美術館は、2004年10月に開館していますが、その経緯を教えてください。

黒澤　ここはもともと、金沢大学の附属幼稚園、小中学校でしたが、1995年に移転しました。かつ、この道路を挟んだ向かい側が石川県庁でしたが、その県庁も駅の反対側に2003年に移転してしまう。そうすると、この街の中心街から昼間人口で4000人が減る。いわゆるドーナツ化と言われる現象ですが、決して都市にとっていいことではない。それでどうにかしないといけないというのが、一つの大きな課題でした。

もう一つの大きなテーマは新しい文化創造でした。金沢は、江戸期からの工芸や能などの伝統的なものはよく残っています。半面なかなかイノベーティブな新しいことは起きにくい。つまり伝統というものが、トラディションとしての伝統も大事ですが、一方でコンサバティヴな感覚にも結びついてしまう。ただただ同じことの繰り返しになっていってしまうと、都市として新しい発展は起こりませんよね。それをどうにかしないといけないというのが、テーマとしての新しい文化創造でした。それで、ある種古い街に極端なほどのコンテンポラリーな現代美術館が持ち込まれました。

松浦　なるほど。「ミュージアム・クルーズ」プロジェクトは、そのような中、どのような役割だったのでしょうか。

黒澤　子どもたちのくったくのない、素直な感性がコンテンポラリーアートと相性がいいと考えたことと、多くの市民の皆さんに新しい美術館に来てもらいかたったので、2004年の開館時に記念事業として開催しました。初年度は、小学校1年生から中学校3年生全員、小学校63校、中学校30校、半年間で40,000名くらいを受け入れました。

松浦　それは、大変ですね。受け入れにはご苦労されたのでは。

黒澤　学校まるごとの移動になるので日程調整から、バスを止める場所から、現実問題、ものすごく大変でした。特に全学年が同時に行くということに対して学校現場は難色を示されましたし、どうしたら実現できるか、全学校に説明しに行って、ヒアリングもしました。いろいろとご指摘をいただきましたが、やりたい気持ちはわかるが無理だと言う方もおられた。600人規模の学校が来たら何が起こるのか、シミュレーションも繰り返し、最終的には金沢市全庁を挙げて協力していただく中で、教育委員会とともに実現していくというスタンスがなければ、できなかったと思います。

松浦　美術館側は、どのような受け入れ体制だったのですか。

黒澤　組織としては学芸課と交流課があります。学芸課は収蔵作品の収蔵、コンテンツを作り出したり、メンテナンスをしていったり、展覧会を作るという、キュレイトリアルな仕事です。交流課は、美術館の新しいテーマの一つ「芸術交流」を担っています。ワークショップをしたり、シアターやホールの活用を通して人が集まったり、市民同士が交流する場を提供するプログラムを考え、運営します。ミュージアム・クルーズは組織横断的な体制で、アルバイトを含めたチーム編成で対応しています。

松浦　10年続けて、どのような変化を感じますか。

黒澤　子どもが美術館にいることは、当たり前の風景になったことは確かで、保育園、幼稚園も遠足で来てくれるようになりました。当時、子どもたちが美術館に来るという常識がなく、美術館の外の門外漢でした。しかし、「そうか、子どもでも行っていいんだ」と思われるようになって、さらには障害のある人や若い世代の家族、外国人など多様性を担保することにも繋がってきています。子どもたちが風穴を開けてくれた訳です。

松浦　なるほど…。

黒澤　全員が美術館に来なきゃいけない、美術館に行くような人間にならなきゃいけないとは思ってないですよ。思ってないけど、知らないまま育たなくてもいいんじゃないか

黒澤伸
（くろさわ・しん）
金沢21世紀美術館
副館長
1959年東京都生まれ。東京造形大学絵画科卒業後、東京芸術大学大学院美術研究科に進学。89年「水戸芸術館現代美術センター（茨城県水戸市）」の立ち上げに参画。99年より準備室時代から金沢21世紀美術館の学芸員として設計やコミッションワークの誘致、コレクションの形成などに関わる。

と。どういう時に消防車を呼んだらいいか、どういう時に警察署に駆け込んだらいいか、どういう時に病院に行ったらいいか、みんなが知っています。せめて消防署の役割、警察署の役割、病院の役割と同じ程度には美術館の役割も知ってほしいなと思っています。

木村さん × 松浦理事長

松浦　木村さんには、「ミュージアム・クルーズ」について、もう少し詳しくお伺いしたいと思います。具体的には、どのようなプログラムですか。

木村　現在は小学4年生を学校ごとに全員招待しています。子どもたちは所蔵作品を中心とした作品鑑賞や、美術館という空間体験の中で、グループで見て感じたことをお互いに伝えあって過ごします。ミュージアム・クルーズは、子どもたちが美術館、現代アート、また地域の大人たちによる鑑賞ボランティア・メンバーの「クルーズ・クルー」との出会いを通して、彼らの世界を拡大していくプログラムです。

松浦　クルーズ・クルーの役割は何ですか。

木村　みなさんには、〝旅の仲間〟として子どもたちと一緒にアートに出会いましょう、きっとわくわくしますよ、発見がありますよと、呼びかけています。アート作品の解説のためではなく、子どもたちとともに作品に出会うことがご自身の生涯学習のプログラムであるととらえてもらえれば嬉しいです。

松浦　クルーズ・クルーは、何人ぐらいいますか。

木村　今年度は約65名です。このプログラムも毎年続けていると、実は私も小学生の時に参加しましたという大学生も出てきますし、金沢に引っ越して来たばかりですが、面白そうなので来ましたという方もいます。

松浦　小学4年生を対象にした理由は何ですか。

木村　先生方との相談の中では発達段階として、作品に出会って自分が思い付いたことを誰かと話したり、誰かが話すことを聞いたり、面白がってできるのは、ちょうど4年生ぐらいがよいのではというご意見をいただきました。さらに5年生や6年生になると知識は増えるし、自分の考えも話しながら他者の気持ちも想像できるようになるけれども、一方で何か間違えてしまうのが恥ずかしくて自由に話さなくなる面もある、とのことでした。

松浦　何の授業で来られるのですか。

木村　どのような時間として活用されるかは学校にお任せしています。図工の授業として行きますというのもあれば、公共施設でのマナーを身につける時間として位置づけることもあるようです。

木村健（きむら・たけし）
金沢21世紀美術館　エデュケーター
1972年岡山県生まれ。岡山大学大学院修士課程修了（美術史）。2000年より金沢市現代美術館建設事務局に勤務、金沢21世紀美術館開館後は教育普及プログラム担当としてキッズスタジオを中心とした子供を対象とする活動、学校連携活動等に携わる。

金氏徹平《Endless, Nameless #1》

オラファー・エリアソン
《color activity house》

松浦　これからの課題を教えてください。

木村　特別支援学校なども含め、市内の学校は網羅しようとしてきました。そういう意味では小学4年生をほぼ全員呼べているとも思っていましたが、この2、3年間はまだ呼べていない子どもたちがいるのではないかということで、地域のフリースクールや不登校の子どもたちについても様子を調べたり、どのようにすれば美術館に来てもらえるかを探るなどしています。そうして、みんなの美術館、みんなと作る美術館により近づいていきたいと思います。

応援してます！

地域課題の解決に取り組む方々を応援する「教育文化活動助成」。今年度の助成対象に決定した134団体・個人（助成総額2,800万円）の教育文化活動のうち、今回は、子どもを対象に活動している団体を紹介します。

特定非営利活動法人備前プレーパークの会

（左から）有正あかねさん、北口ひろみさん（代表）、岡野理律子さん

「遊び」や「学び」を通して里山の現状に目を向けてもらい、多世代・多種多様な人と交流し多くの価値観にふれることで、子どもも大人も育ちあい、また森（里山）も育っていく、そんな地域社会を目指しています。地域内外の人が集う新しい形での「地域コミュニティ」の再生も視野に入れて活動しています。

設立　20105年
主な活動場所　備前市
https://www.facebook.com/bizenplaypark

図工のキラリをみつける会

高橋英理子さん（代表）

芸術家や美術文化とかかわる鑑賞授業を提案・検討し、授業実践をしています。とりわけ「本物」を扱う授業実践では、児童に素晴らしい芸術家の技術や作品との出会いの場を提供。児童の豊かな感性が養われ、自分たちの身のまわりの伝統や文化、美術を大切にしていこうとする心が育くまれることを期待しています。

設立　2012年
主な活動場所　岡山市

Neighbor Kitchen

杉本克敬さん（代表＝左）、杉本洋子さん（右）

知識や経験を創造力、思考力を使い形（料理）に変換する「ツクル、タベル」。この対話型調理を学童保育で実施し、身の回りで起こる出来事に対応する子どもたちの自発性（及びその動機づけ）を高めると共に、大人も子ども様々な価値観に出会える場として、相互理解やそれを促すコミュニケーションの機会を増やし、多様性が受け入れられる社会を目指します。

設立　2016年
主な活動場所　岡山市
https://www.facebook.com/neighborkitchen.ok/

岡山次世代スクール協会

（左から）山本笙乃恭さん、川田峻介さん、安永吉光（代表）さん、高山和成さん
田淵陽太さん、安田伊織さん

「これからの教育を考え、より良いものにしていく」ことを目的に活動をしています。今年度は中高生活動団体「MSB30」が主体となり「子どもも楽しく取り組める防災活動を啓発するイベント「まびっこカエルキャラバン」を開催。真備町の子どもたちにとって希望を持ちながら主体的に活動できる地域、防災意識の高い地域となることを目指しました。

設立　2017年
主な活動場所　真備町
https://www.facebook.com/groups/1274567332625067/

FACE

特定非営利活動法人かんなぎ　理事長
備中神楽総社社中

今野 友紀さん

プロセスから関わって自分事に

子供神楽の衣装や小道具を地域住民みんなの手で作ろうというユニークな活動を始めた備中神楽総社社中のメンバーのひとり今野友紀さん。祭り文化で育まれる縦横のつながりがある元気な社会を目指しています。2018年に新潟県から総社市に移り住み、神楽と出会い、ご自身もイベントで舞うまでに成長した今野さんに、活動について伺ってきました。

獅子舞が盛んな新潟県阿賀野市で生まれ育った今野さんは、民俗芸能・備中神楽（国重要無形民俗文化財）を初めてみたとき、きらびやかな衣装や力強い舞、太鼓の響きに高揚し、魅せられたそうです。幼い頃からお祭りが大好きだったこともあって、自らも舞いたいと、稽古に参加したり、他の社中との交流を始めた。その中で、伝統芸能の担い手が減少していることや神楽自体の存在が知られていないことに気づいた。「私に何かできることはないかな」と、子どもたちを対象とした出前講座や初めての方に向けた解説や舞の体験、現在の備中神楽の実態（社中数、演者数、演目など）などの備中神楽プログラムづくりプロジェクトを立ち上げた。

その活動のひとつ、「神楽針子衆」は、備中子供神楽の衣装・道具つくりに関わりたい人をひろく公募して、ワークショップ形式で衣装の型紙や小道具の制作マニュアルを作る。その様子をWEBで世界に配信するという、SNSを上手く利用したユニークな取り組み。「自分たちは舞えないし、舞うのは興味ないけど、神楽は好きで何かに携われたら嬉しいという人はいっぱいいる。もし今後、神楽人口が増えた時に、神楽をサポートしてくれる脇役の人が増えた方が絶対にお互いにいいし、みんな参加型が発展的だなと思うので」と話す。

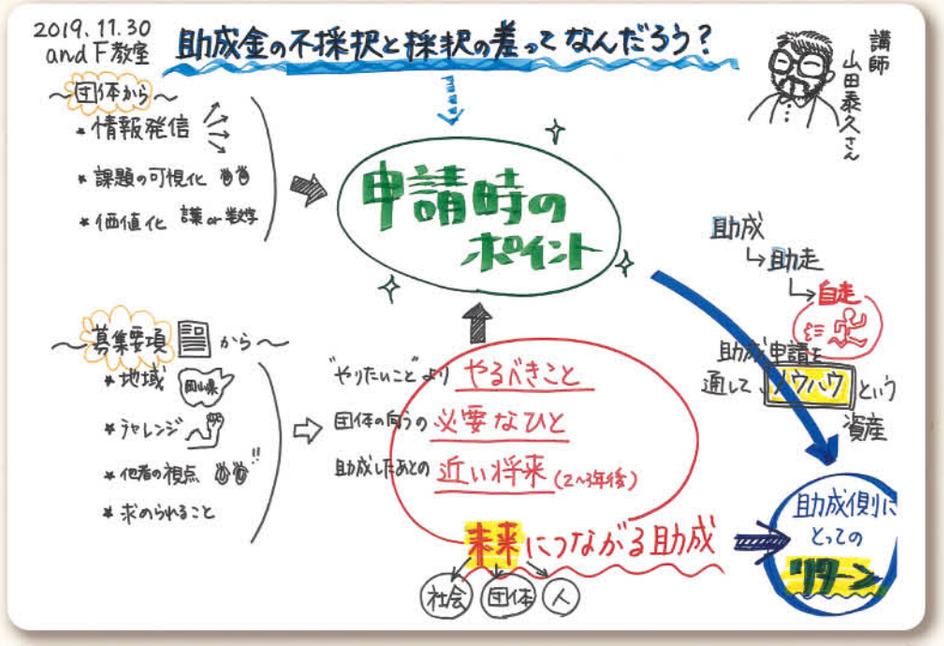
高校時代にアメリカ（オハイオ州）に留学した今野さんには、苦い思い出がある。「日本の文化を教えて」とか「あなたの意見を聞かせて」という質問に、わからないから答えられない自分が情けなかったという。その時に、自分のルーツがわからないことが、生きづらさにつながっているのでは、と思ったことが現在の活動の原点でもある。「本当にやりたいことは、価値のある地域資源を掘り起こした後、それを地域の人たちに誇りに思ってもらうこと。一人ひとりの自己の確立、アイデンティティにつながることをすごく伝えたい。それが次世代育成につながっている」と自らの経験と重ね合わす。

2月には、民族音楽と備中神楽のコラボ「クロスカルチャーKAGURA フェスティバル」を開催する。伝統芸能を継続していくには、新たな試みが必要なのかもしれない。

今野友紀（こんの・ゆき）／ 特定非営利活動法人かんなぎ　理事長/備中神楽総社社中

1980年新潟県生まれ。高校時代にアメリカに渡米。その後関東（埼玉）→関西（京都・滋賀）→九州（長崎）→故郷 新潟で暮らし、現在は総社市在住。
温故知新と刷新をテーマに活動。　かんなぎ～神楽の里プロジェクト～　http://www.chimichi.org

11月30日に開催したandF教室vol.8では、講師に山田泰久さん（一般財団法人非営利組織評価センター業務執行理事）を迎え「助成金の活用5つのポイント」について講義をしていただきました。アンケートでは「基本を振り返ることができた」「わかりやすく有益でした」「具体的なアドバイスが非常に参考になった」との声をいただきました。講義の内容をグラフィックレコーディングでご紹介します。



グラフィックレコーディング　田原牧子（公益財団法人みんなでつくる財団おかやま スタッフ）

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

Cover's Column

地域・三世代交流で町の復興

平成30年7月豪雨で被災した倉敷市真備町は、いまだ多くの方々が戻れない状況が続く。復興には、地域・三世代が集い、高齢者が地域と共に自立し安心して過ごせる環境づくりが必要と考えた。

2階まで浸水した当施設の復旧にあたり、災害時拠点化及びコミュニティケアセンターとして健康寿命延伸に主眼を置き、社会参加を促す為の体験型ケアサービスを導入した。

三世代が一緒に野菜を作り、収穫し、料理し、共に食育を学ぶ。庭では焼きたてのピザやBBQを楽しみ、牧場では動物とふれあい、癒しのひと時を過ごす。ここでは高齢者がケアサービスの受け手としてではなく、三世代協働の担い手、働き手として参加する。そんなコミュニティづくりを進めている。

ここまで我々の復興のシンボルとして見守ってくれた奇跡のポニー〝リーフ〟。昨年の夏新しい仲間〝嵐(ラン)〟を生み、希望も与えてくれた。そして、工事が続く中、骨折後の闘病に耐えていたが、再開を見届け息を引きとった。

今後は復興のシンボルとして記憶に生きる。

源幸 淳司
GENKO Junji
コミュニティケアセンター
ライフタウンまび　センター長

1965年岡山県倉敷市生まれ。1989年一般財団法人倉敷成人病センター入職後、2001年よりロンドンのジャパングリーンメディカルセンターに出向。代表取締役として英国日系社会での医療を通じたコミュニティづくりに貢献。2015年帰国後、医療連携部を立ち上げ医療と産官学との連携に着手。平成30年7月豪雨でグループ内施設が被災し、その復旧と町の復興にむけ尽力。2019年9月より現職にて地域・三世代交流による町の復興に取り組む。

Editor's Column

■私ども財団の助成金で、活動された方に詳細を伺うと、かつて助成を受けた方々が周辺を取り巻いていたことが分かりうれしく思う事例があった。■彼女の話によると、地域情報をどうすればよいか悩んでいたら、知り合いになったA団体の方がB団体を紹介してくれた。早速、B団体の活動に参加して、聞き取り調査の手法を学び、地域の人々から情報を効果的に得ることが出来た。また、同じ地域で活動するC団体代表に「財団の公募助成に申請してみたら」と勧められて応募したら、助成対象となった。そして、助成金で活動内容を冊子にまとめて地域へ発表することで、メディアに取り上げられたり地域の方々への周知が深まった。■このエピソードがうれしいのは、助成金をうけている団体の活動が、また新たな人々へ波及して、循環していると感じられたからだ。単年度の助成金が単発のイベントで終わってしまうのではなく、地域の人々の日常の生活を通じて、それが複合的に組み合わさり循環して、地域振興に有効に活かされているように感じるからだ。■ややもすると、時間がたち、人が変わると中断したり、助成金の効果は何かと悩むものだが、私たち事務局は、団体や個人の思いを大切に、丁寧に一つひとつ応援していくことで、いずれ大きな地域振興につながるお手伝いが出来れるのではと思う次第。2020年も宜しくお願いします。(O)

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION

〒700-0806　岡山市北区広瀬町1番5号
株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL：086-221-5254　FAX：086-232-3190
URL：http://www.fukutake.or.jp/ec/
E-MAIL：eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.71 2020.1.25
編集・発行：
公益財団法人福武教育文化振興財団
制作：株式会社吉備人
デザイン・イラスト：タケシマレイコ
印刷：株式会社三門印刷所